

飯山北高

桂蔭会報

第 35 号

発行日 平成27年11月1日
発行人 長野県飯山北高等学校
桂蔭会長 森 司朗
編集責任者
大熊文久 斎藤秀夫 小林 至
小出一也 木村 徹 久保田雄介
印刷所 中央堂印刷社

誘致した先人に心から感謝し、 桂蔭会は長い歴史に幕を閉じる

桂蔭会長 森 司朗
(昭二七年・第四回卒)



自然界は深秋の時を迎え、夏の猛暑は嘘のように、朝夕はめっきり涼しさを感じる季節となりました。

桂蔭会員の皆様には、ご健勝で活躍のことと存じます。

母校は、明治34年3月20日、臨時県議会において長野県立長野中学校飯山分校の設置が議決され、その2年後に開校された明治36年4月1日は、飯水岳北の地に中等教育の途が開かれた歴史的名日となりました。

明治39年4月1日には、長野県立飯山中学校として独立し、戦後、昭和23年の学制改革により、同年4月1日には、「新制高等学校」長野県飯山北高等学校として改称し、現在に至っております。

開校以来、113年の歳月が流れ「その歴史と伝統は地球より重い」ものであります。

明治、大正、昭和・そして激動する平成時代の中で政治経済・科学技術・芸術文化からスポーツに至る様々な分野で、常にその時代を担う、有能な人材1万6千余名の卒業生を輩出してきました。

時代は日々変遷する中で、平成15年頃から「構造的な原因である」少子化という波に飲み込まれ、中学生が年々減少し、県立高等学校の統廃合問題に急浮上しました。

平成17年3月29日、「長野県高等学校改革プラン検討委員会」の最終報告が発表され、同年6月24日、「高校再編整備候補案」として飯山市内の飯山照丘高等学校・飯山南高等学校・飯山北高等学校の3校を統合するという長野県教育委員会の最終統合案が示されました。

平成18年3月に発表された、「長野県高等学校改革プラン実施計画」は、平成19年度には、飯山照丘高等学校と・飯山南高等学校が統合、平成26年度には、新たな高等学校「飯山照丘高等学校」と飯山南高等学校が統合した新校「飯山北高等学校」が二次統合することとなり、平成19年4月から一次統合として「飯山南高等学校」と「飯山照丘高等学校」が「飯山北高等学校」としてスタートしました。

平成26年4月には最終統合として、「飯山高等学校」と「飯山北高等学校」が新しい飯山高等学校として生まれ変わりました。

飯山高等学校の在校生が卒業する平成28年3月を以て、閉校となります。

飯山高等学校校歌の歌詞の中で、3校統合の表現を「百年に桂（飯山北高等学校）を指す」は育ち、水芭蕉（飯山照丘高等学校）を指す、雪（飯山南高等学校）を指す」と伴ひ、新しさ首途を迎ふ、ねがはくは、この樹の伸びて、雲に触れ、天を蔽へよ、お前えあれ飯山高校」と結んでおります。

新しい飯山高等学校の在校生には、責務として3校の歴史と伝統をしっかりと受け継ぎ、未来に向けた新しい歴史と伝統を創り上げてほしいと思っております。

飯山北高等学校の歴史もさることながら、開校に至るまでの道のりは決して平坦なものではなかったはずであります。

飯山中学校の誘致運動は、130年前にさかのぼり、明治12年頃から始まって初代県議会議長の坂本則敏氏の手によって、市内愛宕山に「飯山中学校設立地」という標識が立てられたことを先輩から聞いたことを思い出し

ます。以後、長年にわたり、ここ岳北の地に中等教育の灯をともし、この強い情熱を持った先人の血のにじむようなご尽力があったからこそ現在があります。以下、県立中学校創立の頃等の記録から、下高井郡中野町（現在のの中野市）との誘致合戦の生々しい記録を追ってみました。

原文のまま抜粋させて頂きましたこの資料は、平成17年4月、小池清氏（昭和24年・第1回卒業生）が作成したものであります。明治32年5月、県では、長野中学校の分校を設置するにあたり「費用6万円と敷地7千坪を用意すれば下高井郡飯山町（現在の飯山市）に設置しても良いが」ということを下高井郡長に照会してきた。

原文（下高井郡中野町二中学校分校ヲ新設スルノ設計ニ有之候処從來中学校増設等ノ場合ニハ其設置ニ当ル關係郡ニ於テモ敷地校等ヲ呈供シ来リシ慣例ニ付貴郡ニ於テモ敷地及創立費等ノ寄付有乃ニ於テハ来年度ニ於テ予算編制ニ可相成モ難計候ニ付至急相当御処置ノ上上ル7月15日迄二何分ノ御申出有之候様御取計相成度依命此段及御照会乃候也。追テ敷地ハ凡七千坪創立費ハ凡六万円ヲ要スル見込ニ付御含ヲ以テ御処理相成度右添申候也」

下水内郡では町村長が集り協議したが、あまりにも多額の地元負担であるため、これを断った。一方、下高井郡中野町では、中野町に分校を設置するよう県に働きかけたので、県はそれ認め、明治33年の県議会上に「中野町に分校を設置する案」を提案した。

これを聞いた当時の飯山町長飯島貴は、町内有力者を説得し、飯山町に中学校分校を誘致する運動を展開した。

そのためには、明治33年の県議会上に提案された「中野町に分校を設置する案」を否決に追い込む必要があった。

その後の活動は、詳細の経緯は長文であり、省略しますが、明治33年12月某日、この問題がいよいよ参事会の議題になり、2名の多数で飯山の勝利（中野町に分校（支校）を設置する案の否決）となった。

その後開催された県議会で参事会決議の報告がされ、採決の結果、参事会の決議に賛成する者に起立を求めたところ中野町に長野中学校分校（支校）を設置する案は、25対12で否決され、知事が発案しない意思を述べたと記されております。

明治34年3月の臨時県議会で、長野中学校の支校（分校）を飯山町に設置する案が可決された。明治33年は我が飯山中学校の好記念の年である。もしこれが、1年早くても、遅れていても永久に、飯山中学校の設置はなかったであろう。と述懐しております。

開かれた「第1回卒業生会」が設立総会となり、初代会長に足立鉄太郎先生が就任されました。この時代にあつては、設立の準備は学校の先生方によって行われ、会の名称は初代会長の足立鉄太郎先生が校章「月桂樹」に因んで命名されたと言われております。

平成26年度 桂蔭会決算報告（昨年度桂蔭会総会で承認されました）

（平成25年9月1日～平成26年8月31日）

収入総額 8,877,387円	収入の部	支出の部
支出総額 6,662,762円	繰越金 3,024,702円	事務費 166,374円
差引残高 2,214,625円	会費 5,420,000円	情報処理費 787,253円
	入会金 308,000円	会報発行費 1,172,516円
	雑収入 115,685円	スクールバス補助866,500円

平成二十七年年度 桂蔭会総会案内
平成二十七年年度の総会を以下の日程で開催します。
会員の多数の参加をお願いいたします。
一 日時 十一月二十一日（土） 十四時
二 会場 ホテルほていや（飯山市本町）
三 平成二十六年度 事業報告・決算報告
平成二十七年年度 事業計画・予算（案）

なお、旧制中学校時代においては、会長は歴代の校長が兼任し、第1代から9代までは校長、昭和23年の10代から18代までは会員の中から選出され、現在に至っております。私の在任中の取り組み、主な事業を振り返ってみたい。

※平成8年8月16日、100周年記念事業及び記念式典が行われました。

「記念講演」は大先輩である池川信夫先生（東京工業大学名誉教授・旧制飯山中学校・昭和19年卒）には、「故郷に新産業を育てよう」飯山地域における健康産業の可能性について講演を頂きました。

また、碩儒先生（京都大学名誉教授）には、「素朴主義の風土が生んだ宮崎史学」宮崎先生の人と学問を偲み、「と題し、身近な宮崎先生の歴史家の偉大さを講演されました。宮崎市定先生は本校の卒業生であり、京都大学で中国史の体系化に画期的な研究業績を残されました。宮崎先生の世界展を展示して、大勢の市民の皆様に見て頂きました。その他、美術クラブOB、同窓生画家による美術展も開きました。

の総会において、山ノ内・中野方面からの冬期間における通学利便性を確保するため、スクールバスを平成19年12月から平成20年3月までの間、試行的に運行することを決定しました。

※平成26年までの利用者は延二万余名を超え、生徒・保護者からは大変好評をいただきました。今後の運行へ弾みが付きました。

スクールバスの運行によって、地域に対して「生徒を大切にする姿勢」をアピールした結果、山ノ内・中野地区からの生徒が増え、初期の目的が達成されました。

※本校の教育環境の充実を図るため、平成17年・18年に飯山北高等学校百周年記念事業教育基金を使用して、3年生教室へエアコンを設置し、引き続き平成23年6月には、1年生・2年生教室及び保健室へも設置しました。

新校舎へのエアコンの設置については、平成23年10月29日の総会において、決定されました。設置時期は建設中の方が設置経費が安価で済むこと、授業への影響が少ないことから、建設中に進めることとしました。

整備費、10,500,000円、整備箇所、全HR教室（18教室）整備期間、平成24年度・25年度の2か年で契約し、平成25年10月に完成し、快適な教育環境の中で授業が行われております。

※さて、現在、飯山北高等学校、飯山高等学校同窓会統合準備委員会（会長森司朗）及び飯山北高等学校閉校式実行委員会（会長森司朗）が継続しております。

※統合準備委員会では、既に、新飯山高等学校同窓会会則（愛称は桂雪会・平成28年度事業計画・暫定予算等を決定しました。新飯山高等学校同窓会の設立総会は平成28年1月に予定しております。今後は、完校式・二次統合完成式及び校舎竣工式典等記念行事等の細部について、協議することとなります。

※二次統合・校舎式典は平成28年6月18日（土）を予定しております。

※閉校式実行委員会は、同窓会館建設・飯山北完校式・二次統合完成・校舎竣工記念事業の支援協力金募集については、目標額を1億円とし、会員の皆様のご協力をお願いすることとしてます。よろしく願います。

※桂雪会完会式（解散式）は平成28年4月29日（祝）を予定しております。平成15年10月、18代会長に就任して以来12年間、多岐にわたる問題の解決にあたり、誠に誠意努力し、指導性を発揮し、歴史的な同窓会統合への途すじをつけることが出来ました。

これも偏に役員を始め、学校関係者、会員の皆様の指導とご鞭撻の御蔭、たと感謝しております。

終わりにあたり、会員の皆様方の益々のご活躍とご健勝を祈念申し上げるとともに、3校の歴史を継承する新飯山高等学校が「輝かしい未来に希望の持てる学びの拠点」となるよう、期待しております。

〔平成27年9月3日記〕

ごあいさつ

桂蔭会の志を新同窓会へ

校長 渡辺 藤夫
(昭五一年・第二八回卒)



桂蔭会員の皆様には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。平素、本校の教育活動や教育環境の充実のために多大なるご支援を賜り、衷心より御礼申し上げます。

この4月、前任の二ノ宮邦彦校長より引継ぎ、第30代飯山北高等学校校長として、飯山北高校から新生飯山高校への橋渡しを担うことになりました。第28代の米澤修一校長の下で、教頭を3年間務めさせていただき、長年、統合に関わってきたものの、来年度の4月に完全統合を迎えることを思うと、その責任の大きさをひしひしと感じる次第です。

統合2年目の本年4月、新入生27名（普通科12名、探究科8名、スポーツ科26名）を迎え、普通科・探究科の生徒は北キャンパスで、スポーツ学科は北キャンパスで、スポーツ学科の生徒は南キャンパスで元気に学んでおります。最後の卒業生となる北高生は3学年の133名のみであります。北キャンパスの最上級生として自らを研鑽し、新校の1・2年生の良きお手本となっております。

7月に開催された最後の「北高祭」は、有終の美を飾るに相応しいものにと、北キャンパスの生徒が一致協力して取り組み、例年以上に素晴らしいものとなりました。学業に懸命に取り組み、生徒会やクラブ活動に燃え、良き仲間と協力し目標を成し遂げようとする本校生の気風は、飯山北高校の歴史とともに長年培われてきたものであり、10・20年生にも確実に伝わっております。

また、新校舎の建設も、平成25年9月に本校舎が完成し、現在、スポーツ学科棟と部室棟の建設が進んでおり、この12月に完成予定です。また、玄関前の舗装工事や城北グラウンドの防球ネットの建設も今年度の作業となっております。現在、古い校舎の面影は見えなくなり、かろうじて周囲の樹木が残っているだけで、新たな校舎が威風堂々とその存在感を示しております。校舎は新しくなりましたが、新生飯山高校のルーツは紛れもなく、明治36年4月、ここ飯山の地に中等教育の灯をともした長野中学飯山分校の開校にあり、飯山高校の校歌にも次のようにうたわれております。

「奥信濃 城下の町に 学べよと 貧しき中ゆ郷びとは 学舎を設けぬ 知の拠り処 桂を植えぬ われらの樹 桂を植えぬ おお栄えあれ 飯山高校（4番）」

百年に桂は育ち 水芭蕉 雪と伴ひ 新しき首途を迎ふね

がはくば この樹の伸びて 雲に触れ 天を蔽へよ おお栄えあれ 飯山高校（5番）」

校歌の歌詞は、飯山中学第41回卒業生である、飯山出身の歌人田井安曇氏によって作詞されました。田井氏は、昨年の11月に84才で逝去されましたが、母校を大切に思う気持ちにより作詞いただいた経緯がございます。また、現在の飯山北高校の校歌は、伝統歌として、これらも飯山高校校歌とともに歌い継いで行きたいと考えております。

平成28年3月5日、最後の卒業式の後には飯山北高等学校の閉校式を行い、いよいよ飯山北高校の歴史に幕を閉じることになります。また、28年の6月には、同窓会やPTAと共催で統合完成及び校舎竣工記念式典を行う予定であり、新たな歴史も始まって行きます。このような歴史の節目に当たり、学校の教職員一同、地域の皆様や桂蔭会の皆様、そして各方面で活躍されている先輩諸氏の期待に応えるよう、これからの有意な人材の輩出に邁進していく所存であります。

桂蔭会と飯山高校同窓会の統合による新同窓会の設立は来年の1月、そして桂蔭会の完会式を4月に開催する予定です。桂蔭会の皆様は、そのまま新しい同窓会の会員になられ、引き続き母校をご支援いただけるものと期待しております。

最後になりますが、皆様には今後とも本校の教育実践に引き続きご注目いただき、後輩の育成のために、教育環境整備や教育支援に格別なご理解とご協力をお願い申し上げます。

2

この機に同窓会館建設を

第28代飯山北高等学校長

米澤 修一



1 はじめに

平成19年4月の第1次統合により、飯山照丘高校と飯山南高校が統合され飯山高校となり、さらに2次統合で飯山北高校が飯山高校と統合され、平成28年4月には今学年が飯山高校生となり新たな飯山高校として出発することになりました。足掛け10年近くをかけた長野県の平成高校再編の輝かしい草分けとして、飯山高校は存在しています。

この機に同窓会統合も検討され、飯山照丘高校同窓会と飯山南高校の松ヶ会が統合した飯山高校同窓会が、飯山北高校の同窓会である桂蔭会と統合し、新たに飯山高校同窓会「桂雪会」が検討されています。とお聞きしています。統合の構想の初期から関わり、校舎建設及び関係施設整備の構想や探究科設置・SSH指定校等に関わってきた者として、学校統合のみならず、同窓会・PTA・部活動等、あらゆる

る場面で決して容易ではない統合の道を模索していただいておりますことに心より敬意を表し、また感謝を申し上げます。

2 趣旨

この第2次統合が完成し、同窓会統合が完成するこの機に記念事業を計画されていることをお聞きし、当初夢をもつて語られていた3校統合の象徴としての同窓会館の建設について改めて関係の皆様にお話し申し上げ、是非とも実現されるよう願うものでございます。この機を逃せば、同窓会館建設は極めて困難になるであろうと予想されるにつけ、また長野県下を見渡せば、長野高校・上田高校・松本深志高校・野沢北高校・伊那北高校等の伝統校が同窓会館を所有していることを思うにつけ、飯山高校にも是非とも同窓会館を建設して、伝統の維持・保管展示・広報・現役への還元等に資するような多目的利用が可能な同窓会館の建設を推し進めていただきたいと心より願うものでございます。野球場と体育用のグラウンド整備・施設整備、校舎の外構工事関係等については、渡辺藤夫校長先生のご尽力により県の対応が一部見込まれそうだとこのことで、そうなれば今回の記念事業は、同窓会

館建設を目標に定めることができますと考えられます。従って募金の目標額も実現可能な相当額を掲げることが必要になると考えられます。

3 同窓会館の内容

3校統合の象徴として、文化伝統の象徴として、また4市村振興の鍵を握る存在として、飯山高校の同窓会館はどのような役目を担うべきでしょうか。試案として記してみたいと思います。

(1) 同窓会の会議室等

事務局の部屋、大会議室あるいは小ホールと小会議室。同窓会のみならず生徒・職員の利用も可とする。有料で一般貸し出しも可とする。小コ

ンサートも可能に。

(2) 現役生のための学習室

(3) レストラン(あるいは食堂

生徒や職員の利用だけでなく、観光客等一般の方も入場可能なものにする。市の観光担当課と連携。業者参入方式収入が発生する可能性。地元食材・料理の提供。

(4) 宮崎市定先生、田井安曇先生の著作等関係資料を保管・展示する部屋

入場を有料とすることも可。市教委及び観光担当課と連携。スキー・野球等の歴史・トロフィー等は本校舎内の部屋がすでにあるのでそちらに保管・展示。

(5) 入口・玄関・会議室等に生徒の課題研究ポスター、製作物展示、学校案内パン

フを置いて広報。課題研究で飯山高校らしいオリジナルグッズが製作できれば販売も可能。

(6) 寮について

探究科の充実発展のため、他県や県内遠方の入学者も視野に入れ、当初は寮を含めた同窓会館を構想していましたが、渡辺校長先生のご尽力により県は現在あるスポーツ科学科生のための静間寮の改修に踏み切り、男女20名ずつの寮になることが決定しました。将来的には他科の生徒の入寮可能性を検討することによって同窓会館の内容から外すことができそうです。同窓会館建設の規模は縮小可能になり負担は多少軽減されます。

4 同窓会館の建設場所

候補地としては、旧2中学校跡の体育用グラウンドの一角、以前給食センターがあった辺りか、あるいは2中体育館があった辺りででしょうか。他にも適地があればご検討ください。

5 記念事業の一環として検討いただきたいこと

(1) 新校歌の碑・短歌碑の建立
田井安曇先生(歌人・卒業生)の作詞になる新校歌の石碑を立てていただきたいと思っています。両面利用として、片方に新校歌、もう片方に田井安曇先生の代表的短歌を刻む

ことができればと願うものです。田井安曇先生は昨年11月に逝去。短歌結社「綱手」の主筆者だった方。短歌界の芥川賞と言われる詩歌文学館賞や島木赤彦賞を受賞。島木赤彦賞受賞の「田井安曇全集(6巻)」他、詩歌文学館賞受賞の「千年紀地上」等多数の歌集があります。「綱手」との連携協力が理想的です。いずれ飯山市の名誉市民に推薦したい方です。

(2) その他

6 募金組織等

両同窓会長や多忙な渡辺校長先生には負担をかけないよう、実行委員会を組織し、計画的に強力に推進されたい。飯山高校同窓会と桂蔭会が協力して、桂蔭会組織が有して

事務局より

【振込取扱票】

会員の皆様の元に支援協力金および会費(一部の会員の振込取扱票が同封されていますのでよろしくお願いたします。桂蔭会のご協力期待您的しています。

【桂蔭総会11月21日(土)】

総会当日15時より高山正輝氏(博士)の特別講演会を予定しております。略歴は以下の通りです。ふるってご参加下さい。

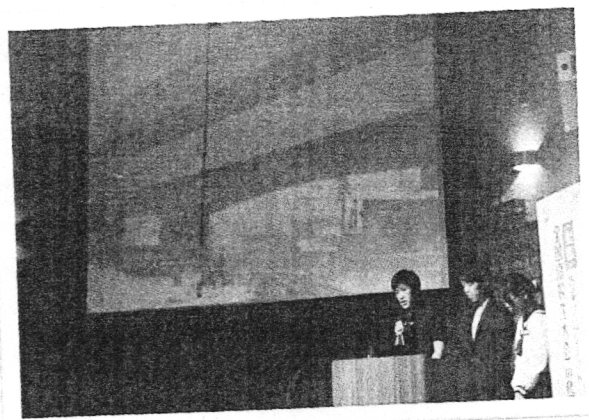
平成17年3月 飯山北高等学校卒業 平成27年3月東北大学大学院理学研究科天文学専攻後期課程 修了論文題名は『大小マゼラン星雲の赤色巨星変光星の研究』日本学術振興会特別研究員PD(東京大学)所属 会報が最終号となる事に一抹の寂しさを感じながら記しています。今後は飯山高校同窓会報(桂雪会報)として継続発展していくことを願います。

いる行動力をいかし、一緒に動かせることがよいのではないでしょうか。東京関東支部及び全国の支部とともに強力に推進していただきたいと思っています。

飯山市・木島平村・野沢温泉村・栄村の近隣4市村からも、地域の浮沈を握る大切な高校として、特別に熱いご協力をいただけるよう働きかけていただきたいと思います。

また地域の事業所等にも多大なご協力をいただけるよう商工会議所等を通じて働きかけていただきたいと思います。

以上、この機に3校の卒業生の総力を結集し、県下に誇れる同窓会館を建設しようではありませんか。「徳帆船能」、「弗慮胡獲 弗為胡成」です。



統合高校は今…

紙面の関係でくわしく紹介できないのが残念ですが、統合飯山高校の新たな伝統を創ろうと取り組む探究科1年生（二〇一五年度入学生）のアクティブに学ぶ姿をお伝えします。

「ふるさと創生学」で

「消滅」回避に向けた学習を

探究科1年生は今、「ふるさと創生学」にとりくんでいます。この試みは東京・麻布高校が始めた日本人としてのアイデンティティのあり方を考える文化学習である「故郷 四番プロジェクト」を導入学習として中野・飯山地域の現在を見つめ直し、後継学習である「ふるさと創生イノベーション」において地域の「消滅」回避をテーマにして課題解決型探究学習（PBL）を展開するイノベーション教育の試みであり、「21世紀のふるさと教育」をめざします。

唱歌「故郷」の誕生から一〇〇年を経過した中野・飯山地域ですが、日本創成会議の試算によると、地域を構成する7市町村のほとんどが「消滅」とされており、地域の存続が危惧される深刻な事態に直面しています。そこで、飯山高校探究科では、1年次より一連の学びを通じて中野・飯山地域の希望創出にとりくみ、まちづくり（地域活性化）に必要な「意思」（意欲×考え方・学び方）の習得をすすめます。

〈故郷〉四番プロジェクトで

地域の現在を見つめ直す

〈故郷〉四番プロジェクトは、元来は東京・麻布高校が「教養総合」でとりくんできたものです。麻布高校では首都大学東京の西島 央先生（麻布高校OB）の指導により、唱歌「故郷」が日本人の心の拠り所となってきた理由を学びながら、日本人としてのアイデンティティのあり方を考える学習として展開されています。日本各地の文化的な違いを認識した上で、その違いを互いに認め合い、21世紀の日本のあるべき姿を「見える化」して共有することをめざすこのユニークな学習は、これからの日本のあり方を地域社会（ローカル・ジャパン）の視点も加えてデザインをし直すイノベーション文化の学びに他なりません。このような優れた教育の試みに共鳴し、統合飯山高校としてもプロジェクトへの参加を決めたという次第です。

〈故郷〉四番プロジェクトと称していますが、これは完成された3番までの唱歌「故郷」の歌詞に新たに4番の歌詞を加えるということではありません。また、作品発表時には唱歌「故郷」のメロディーで創作歌詞を歌うこともあるため、唱歌「故郷」の替歌づくりのように誤解をされる方もありますが、そのような替歌づくりでもありません。プロジェクトはあくまでも日本人としてのアイデンティティのあり方を考えるための文化の学びであり、プロジェクトを指

導されている西島 央先生も「歌詞づくりを通して地域社会を見つめ直すことにより、地域社会の活性化にもつながることを期待しています」と述べられています。

本校でのとりくみは、5月8日（金）に西島 央先生と麻布高校の村本ひろみ先生に來校をいただき、プロジェクトに関する特別授業をお願いすることから始まりました。この試みは多くのメディアの関心呼び、北信濃新聞と北信ローカルの地域新聞2紙に加え、信濃毎日新聞にも翌日の朝刊でたいへん大きく報じられました。新聞掲載がきっかけとなり、長野放送（NBS）やNHK長野放送局、信越放送（SBC）からはテレビ番組やラジオ番組の製作のお話をいただきました。メディアに注目されたことは生徒のモチベーションアップに繋がったようであり、かなりのハードスケジュールであったにも関わらず、生徒はプロジェクトに懸命にとりくんでくれました。創作活動に際しては、創作歌詞は決して替歌ではないこと、観光PRソングでもないことを確認させ、中野・飯山地域の現在をしっかりと見つめた上で、地域や時代（世代）を超えて共感を得られる歌詞を考えることが大切であり、それが代表選考の際の重要な評価基準であることも伝えました。

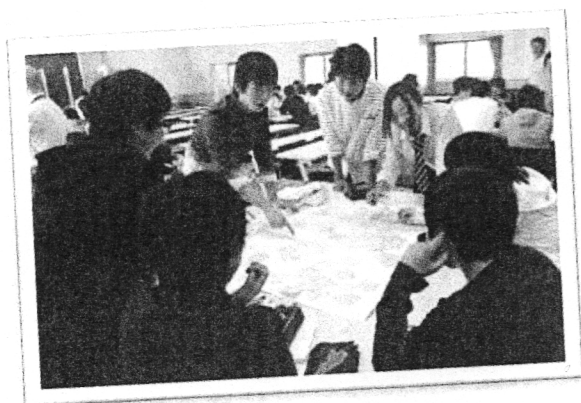
こうしたとりくみの成果として、素晴らしい作品が多く生まれました。校内での発表会（代表選考会）の結果、「郷の愛に気づかず 都会を求め旅立つ 雪を見ればふと思ひ出す 胸の中に故郷」という徳永好花さん、山崎成尚くん、山崎 慈くんの創作歌詞が最優秀賞に選定され、全国大会（鳥取大会）への出場が決まりました。この作品は豪雪地に暮らす私たちの雪に対する複雑な想いを詠った作品であって、唱歌「故郷」発祥の地としての存在感を示した創作歌詞だと思います。この他にも地域おこし協力隊を活用したまちづくり（地域活性化）のとりくみで注目されている木島平村への溢れる想いを創作歌詞にした青木友輔くん、本山柚月くん、山崎雅貴くんの「活気あふれる我が村 若者は村を去る 祖先の想いを胸に刻み 伝え築くふる

さと」や観光立村である野沢温泉村の想いを受け継ぐ決意を鮮明にした内田風花さん、鈴木紅羽さん、野崎まどかさん、山崎結夏さんの「温泉 道祖神 スキー場 支えてきた村人 それでも人は減り続ける つくつていこう 故郷」なども地元愛（ローカル・アイデンティティ）を表現した秀作であり、心に強く響くものがありました。このようにプロジェクトは「21世紀のふるさと教育」の名に恥じない可能性を感じさせる創作歌詞を多く生み出して、私共が想定した以上の大きな成果をもたらしました。

プロジェクトを通じて

デザイン思考を鍛える

プロジェクトは、イノベーション創発の学びに多用される「デザイン思考」の手法を真似て、必ずしも正解と呼べるものがない問題に対して答え（納得解）を出すための考え方や学び方を体験させる「21世紀型学習スキル」の実習と位置づけて実施しました。具体的には「日本」

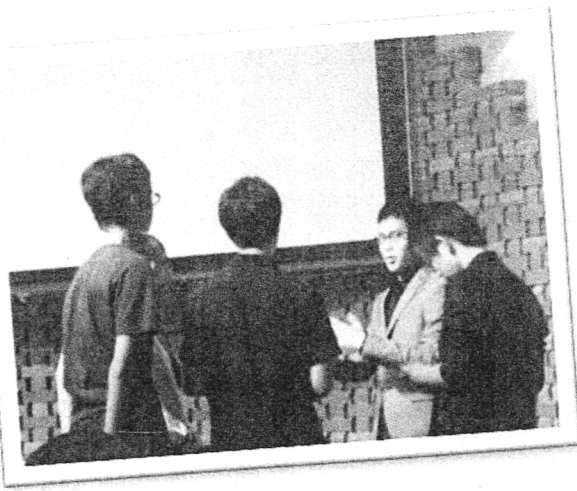


「地域（中野・飯山地域）」「故郷」「唱歌（故郷）」という4つの言葉から思い浮かぶ連想イメージを言葉にして書きだし、それらを関連図にまとめるというグループワークの試みです。これは創作歌詞のコンセプトを考える上では不可欠の作業ですが、最初は戸惑っていた生徒も次第に必ずしも正解と呼べるものがない問題に答え（納得解）を出すことの面白さに魅了されたようであり、途中からは真剣な表情で関連図の作成にとりこんでいました。

全国大会での学習交流と

ふるさと創生イノベーション

〈故郷〉四番プロジェクトは唱歌「故郷」が誕生してから一〇一年目となる今年、初めての全国大会が鳥取市で開催されました。全国大会には全国から8校が参加しましたが、公募で参加校を募ったものの、初回開催ということで周知徹底することは難しく、西島 央先生らを中心とする実行委員会がプロジェクトの趣旨にふ



さわしい高校に声をかけ、参加校が決まったそうです。このような経緯から考え、統合高校が参加校に選定されたのは、桂蔭会がこれまでと異なってきた「ふるさと」の「意思ある学び」の試みを評価していた、といった結果であろうと思われる。「ふるさと」の「意思ある学び」は、地域が直面している課題を探究する課題解決型の学び（PBL）にチャレンジさせながら、まちづくり（地域活性化）には欠かせない意思（意欲×考え方・学び方）を身につけさせ、まちづくり（地域活性化）を専門的に学ぶ大学（まちづくり系大学）への進学をめざそうという生徒を育成する試みです。この試みは統合高校に継承して「ふるさと創生イノベーション」として内容的にも充実を図りながら展開する計画でしたが、こうして〈故郷〉四番プロジェクトに参加したことで中野・飯山地域の「消滅」回避をテーマとする課題解決型学習（PBL）をすすめる上で絶好の動機づけとなり、心配された事業継承もスムーズにすすんでいます。なお、このような事業継承の意味から、全国大会にオブザーバー参加したグループの交通費と宿泊費は桂蔭会に支出をお願いしました（正規参加のグループは鳥取県が支出しました。今回の支援に対して、この場をお借りして御礼を申し上げます。さて、7月25日（土）〜26日（日）に開催された全国大会は、参加生徒にはとてもよい学習交流の機会となりました。大会では「21世紀の地域社会を描いているか」「地域を越えた共感が得られるか」「世界の人々の共感が得られるか」など5つの観点から参加8校の作品を評価してそれぞれに賞が与えられましたが、参加生徒、特にによる投票の結果として、5賞のうち3賞を麻布高校が獲得をし、飯山高校は「時代（世代）」を越えた共感が得られるか」という観点からの賞を1ついただいただけで終わりました。それでも、2〜3年生が中心の他校に対して本校は全員が1年生であり、他校の先生方からも「飯山高校の1年生、しっかりしてますね」という評価をいただいたり、麻布高生からの評価コメントにも「高野辰之のエピソードを紹介したところが

新鮮で、とても興味深かったです。人口流出の問題、切々と心にくるものがありました」と記されるなど、本校生徒の発表には優れたものがありました。6分間のプレゼン発表を課す全国大会のハードルは高く、大会の3日前でも発表資料はほとんど白紙に近い状態でしたが、生徒は頑張つて3日間でこれを仕上げました。唱歌「故郷」発祥の地に学ぶ飯山高生としての誇り（ローカル・アイデンティティ）が、生徒の「全国から集った高校生の心に響くような発表をしたい」という強い想いを支えていたように思います。本当に見事な発表でした。

このようにプロジェクトは実に優れた「交流まちづくり」のとりくみであり、大会終了後は麻布高生と親しく談笑する飯山高生の姿がありました。また、大会参加をきっかけに豪雪期の中野・飯山地域に麻布高生を招いて交流をするなど、都会の超進学校との少し背伸びした交流（高連携）が実現する可能性も出てきました。「消滅」回避に向けた具体的アクションの一つとして、こうした「交流まちづくり」の試みはぜひとも実現をしたいと考えます。

こうして全国大会をもって〈故郷〉四番プロジェクトは終了し、これからは後継学習である中野・飯山地域の「消滅」回避に向けた学習をスタートさせることになります。そこで、鳥取からの帰路には大会正規参加の徳永好花さん、山崎成尚くん、山崎 慈くんの飯山市グループは「市民主役のまちづくり」のとりくみで有名な福井県鯖江市を、オブザーバーで参加した青木友輔くん、本山柚月くん、山崎雅貴くんの木島平村グループは「森林資源を活かした産業まちづくり」で知られる岡山県西栗倉村を訪問視察するなど、プロジェクトによって地元愛（ローカル・アイデンティティ）に目覚めた生徒が、「ふるさと創生イノベーション」にも積極的にとりくみ始めました。他の生徒からも、「消滅」回避にとりくむ新たな学びに対する意気込みが伝わってきています。以上のような「ふるさと創生学」の試みに対して、桂蔭会員の皆さまのご理解とご協力をお願いする次第です。

〈故郷〉四番プロジェクト 授業評価アンケート

プロジェクトを通じて、中野・飯山地域の現在を見つめ直すことができましたか？

①しっかり見つめ直すことができた	55%
②ある程度、見つめ直すことができた	41%

〈故郷〉四番プロジェクトの後継学習となる「ふるさと創生イノベーション」において、どのような探究活動をしてみたいと思いますか？

①地域資源を活かした産業まちづくり	41%
②文化資源を活かした交流まちづくり	28%
③市民参画による協働まちづくり	19%
④探究してみたいテーマではない	13%





飯山北高の閉校によせて

校歌とスキー

武田 芳彦（昭和38年卒）
昨年、古稀を迎えた。卒業して52年になる。

来し方を振り返ると、飯山北高の3年間は未熟と不安の青春時代だったが、今それなりに自分にはここにいて、この学校が自分にはいけばん相応しかったのだと頷くことができる。これまで、この学校のことで自慢してきたことが二つある。一つは校歌である。甲斐の高嶺と飛騨の深山から流れ出て越後の海に至る千曲川の壮大な詩が良い。一番から四番まですべて異なる曲調も良い。

もう一つはスキーである。北信濃の豪雪の利を活かした県大会やインターハイでの数多くの優勝は誇りに足りる。このスキーも昨今は鳴かず飛ばずの不振で淋しい。

飯山北高の完校によせて

江口 七郎（昭和38年卒）
平成28年3月をもって、飯山北高等学校の閉校の通知をいただきました。

郷土奥信濃の地を離れて50余年。様が変わりする社会・環境の中で、昔のおもかげを見つめるのが大変な程、変化していることでしょう。高

齢化の波が全国に広がり、少子化の中でどう活性化していくのが課題のように考えます。高速道路が近くを通り、新幹線が飯山駅に停車することを思うと、日本の文化は、どこに

いても同じように広がっていく時代です。木造校舎の窓から満開の桜を眺めながら、貧しい生活の中でも自分の夢に向かって努力した精神は、その後の人生の柱となって開花していきました。

新飯山高等学校の開校に向け、そこで学ぶ若者たちが、夢を持ち、粘り強く努力する礎を築く学舎になる事を期待いたします。

飯高に「意思ある学び」を！

小林 正二（昭和41年卒）

飯山北高校（飯高）の前には、飯山中学校（飯中）があつて、北高の後は飯山高校（飯高）が続く。それ故、この度の北高の完校や桂蔭会の完会は、ある意味理系でいう相転移の一プロセスだ。それも、DNAによる生命の個体的（ハード的）相転移ではなく、むしろ、人類の英知によつて古代、中世、近世へと社会を高度化させた体系的（ソフト的）相転移がふさわしい。北高から飯高への望ましい相転移を以下の通り想定してみる。

それは、飯中・北高OBでその分野で一流となられた例えば宮崎市定氏や杉山 進氏などの学びの方法に深く思いを馳せ、生徒自身が北信濃の自然や歴史に触れ学びの面白さを発見し得る飯高にしていくことだ。

その際に大切なことは、一線を退いても世界の視点をもつて当地出身の方々と北高OBにUターンを願ひ、飯高の先生や地元と共に賑やかに「意思ある学び」を推進してもらふことこそが、地元と生徒の未来を切り開くことになる。

飯山北高の完校によせて

保坂 正明（昭和39年卒）

♪甲斐の高嶺に降る雪は♪桂蔭会支部総会、同窓会等々で最後は全員で大合唱、心に残る校歌でした。我々の時代は学業はもちろん、クラブ活動等も活発に行われ、まさに文武両道の校風でした。そして応援歌、飯高別れの鐘等々、学生のころ声高らかに歌った事、なつかしく思い出されます。

我が母校も、いよいよ28年4月より新校、飯山高校になるとの事、少子高齢化が進み、子供が少ない状況では、しかたのない事だと思います。新しい時代を築く若人へ、お願いしたいのは、旧制飯山中学校、飯山北高校の先輩諸氏の残した功績、伝統を忘れる事なく、未来を築く新しいリーダーが育つ事を期待します。

飯山北高の完校によせて

青井（旧姓 岡村）富雄（昭和42年卒）

私が昭和42年に北高を卒業してから早50年近い歳月が経つ、光陰矢の如しとは、良く云ったものである。今、振り返っても思ひ出は尽きないが、特に強烈に残っているのは、2年の冬秋田県花輪で行われた全国高校スキー選手権大会において、男子は北高、女子は南校が、揃って総

合優勝したことである。飯山の街は、初の全国スキー大会アベック優勝で沸きに沸いた！

その南校（現飯山高校）と来年4月に完全統合をし、飯山北高が完校するということは、若干寂しくも、又不思議な縁を感じている。

日本の原風景を色濃く残している飯山の地に、10余年の歴史を刻む北高の伝統は、必ずや、次の世代、飯山高校の礎となるであろう。これからも素晴らしい人材を輩出していくことを心から期待する者である。最後に、あの明治調の北高の校歌は是非何らかの形で残して欲しいものである。

飯山北高の思い出

町井 秀明（昭和45年卒）

平成28年4月から飯山北・飯山高校の統合により新しい飯山高校がスタートすることになり、私の母校に対する思い出を述べてみたいと思います。私が在学していた頃は、約半世紀前、男子生徒が圧倒的に多かったせいか、学校の雰囲気（「質実剛健」の気風が強かったように感じられました。直立不動の姿勢で厳しかった校庭での応援練習・怒声の中で心身ともに震えた体育館での風紀委員長の指導・熱い声援の中で気合が入り心地好い汗を流した管内一周の駅伝大会等数々の出来事が今では良き思い出として脳裏に浮かんできます。

北陸新幹線が開通し、岳北地域の益々の発展が望まれる中、110余年も続いた伝統ある飯山北高校の名が途絶えることは、甚だ寂しい限りですが、これも時代の流れであり、新しい飯山高校が両校の良き伝統を継承し、新たな輝かしい学校づくりができるよう願ってやみません。

帰郷五年、初志貫徹

江澤 岸生（昭和48年卒）

2010年7月、故郷に貢献すべく帰郷、9月の市長選に挑戦し、敗退。四年間の浪人生活。月例勉強会を通じ、多くの新たな知人を得ました。2014年9月の市長選に再挑戦すべく、2月から6月まで市内8千軒を一軒づつ訪ねました。

雪の2月、残雪の3月、桜の4月、菜の花の5月、あつという間に田植こんなにくつきりと季節を感じては初めてでした。

結果は、得票率45.7%で再び敗退。投票率は、74%超と、停滞する首長選のなかでは、最高水準でした。

11月の市議選に挑み、当選。是非々々を旨に活動しています。

新幹線飯山駅は、一日の利用目標2600人に遠く及ばない現況。飯山線SL走行実現や長野県での国民文化祭開催により、少しでも新幹線飯山駅の利用増につながればと訴えています。

近年10年間で常勤医が10人減った飯山日赤病院の維持も地域にとつて最重要課題です。

先々のことも視野に入れながら、当面、議員としてしっかり取り組み、故郷に貢献するという初志を貫徹する決意です。

完校によせて

金井 繁昭（昭和61年卒）

私は、高校生として3年間、教員として7年間、合せて10年間北高で育てていただきました。

特に、教員として質実剛健な校風の中で精一杯高校生活を送る生徒たちと過ごした7年間は大変思い出深く、今の自分の土台となっています。

また、我が家は妻も、2人の娘も北高OGであり、北高一家です。いつもケーブルテレビで放送される北高の様子を楽しみに拝見しております。北高は卒業生にとつて心のふるさとです。北高がなくなってしまうのは本当に寂しい限りですが、北高の良さを継承しつつ、未来に向けて新たな挑戦を続ける新飯山高校のご発展を心よりお祈り申し上げます。

完校によせて

松浦 博之（昭和58年卒）

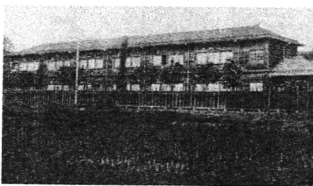
友と集い学んだ古い校舎が、新飯山高校体育科の着工に伴い取り壊された時、惜別の情を深く感じました。当時を振り返ると、様々な行事や部活動での友の笑顔が目に見え、雨の中の激闘を征したクラスマッチ、修学旅行先の京都で食べたお好み焼き、いずれも楽しい思い出です。『矢よりも早き三年』は大切な友人との出会いと、人生（進路）を決定する大切な期間でした。幸いにも我が子二人も、自主性を尊重する伝統ある北高で学ばせて頂きました。親のひいき目ですが、世間に恥じぬ人間に育てくれたと思います。これも赴任された歴任教職員の皆様や地域の方々のお力添えの賜物と深く感謝申し上げます。そしてなにより在学した生徒一人一人が北高の歴史と伝統を受け継いできたからであると思います。これからも歴史と伝統は皆の心に残っていくに違いありません。統合された新飯山高校は北高の跡地に新設されました。地域に密着し、地域の特性を活かした教育が実践され、あらゆる面において、全国に誇れる学校になることを心から期待いたします。そして地域社会に貢献できる人材が育っていくことを願います。

最後になりますが、私達、昭和58年度卒業生は卒業20年、30年の記念同窓会を開催してまいりました。次は35年目に開催予定！大勢の仲間が集まりますように！！

いま問われるべき、北高卒業生としての矜持

田中 直人（平成5年卒）

入学直後の生徒総会。侃々諤々の議論のさなかに生徒会長述べた「北高は地域の期待を背負う存在。何をなすにもその事実から始めねばならない」との言。高校時代の記憶を辿らんとした際、私の頭にはいつもこの言葉が浮かぶ。地域からの視線をつねに意識し、その期待に応えんとする。当時の北高生はこの一事をとくに重んじていたように思う。若者が真に社会の一員となるには、年長者から信頼を寄せられ、その社会集団に必要な存在であると自覚することが必要である。それは子育てと同じであり、子がその住まう空間を「家」と感じ大切なものと理解するには、家族からの注目と期待のなか育まれることが不可欠なのである。自己肯定感が弱いとされる昨今の高校生が地域からの思いをきちんと感じ取れているか、甚だ心配である。かつて私たちに向けられた、信頼と期待を込めた温かくも厳しいまなざしを、同じようにいまの生徒たちにも向けること。それが北高に学んだ者のつとめであり、地域社会の一員としてその未来に対する責任の一端をはたすことであると考えている。



支部活動リポート 東京・関東支部だより 平成二十六年年度 東京・関東支部役員会報告

高橋 彰（高24回卒）

快晴の十一月十六日（日）、平成二十六年年度桂蔭会東京・関東支部総会を、東京市ヶ谷の「アルカディア市ヶ谷」で開催した。支部規約に則り、今年は2年振りの総会であるが、北高校歌のBGMが流れ、長坂邦彦氏（高6）が撮影提供した飯山の風景や山々の唱歌歌詞入り写真が展示された会場には、早くから懐かしい再会を求めて多くの方々が集まった。昨年の役員会で選出された新支部役員体制で初めての総会であり、支部部長の高橋（高24）の司会のもと、青井（旧性岡村）支部長（高19）の開会挨拶で始まった。来賓として、飯山高校との姉妹校提携でオーストラリアへ出張中の二ノ宮校長先生に代わり、杉村教頭先生からは「飯山高校への統合に伴う飯山北の『閉校』を『完校』としたい。飯山高校には、飯山市唯一の高校として優秀な生徒が沢山集まっている」とのご挨拶を頂いた。引き続き、桂蔭会担当の大熊先生（高25）から、桂蔭会本部の森会長からの祝辞メッセ

ージを代読頂いた後、飯山高校のパンフレットと同窓会統合への流れについてご紹介頂いた。続いて総会議題である支部活動報告を本部副会長・代議員の長坂邦彦（高6）が行い、新支部体制および長野県同窓連の紹介と飯山高校統合へのスケジュールが報告され、あわせて東京・関東支部設立の経緯が説明された。また、歌手の越路吹雪さんが飯山南高に在籍していたことから、飯山高校への統合の暁には同じ同窓生となるこの話題提供があった。さらに、副支部長の阿部靖典氏（高31）から会計報告、幹事の岡田庸利氏（高8）から会計監査報告があり、活動報告、会計報告ともに承認された。講演会は、元ソニー（株）英国プリジエント工場長で「大英帝国勲功賞」を受けられた常田哲夫氏（高6）から「もの造り40年」と題して、英国の労働事情や工場立ち上げにあたっての英国王室からの支援など、日本企業が海外進出する際の並々ならぬ苦労談と逸話が紹介されました。

関西支部からのお知らせ

（S41高卒 関西支部 小林正二）
昨今の桂蔭会関西支部は新規会員がなく高齢化が著しく進んで瀕死の状況を呈しています。そのような事情から、未だ余命あるうちに当支部会員諸氏にお諮りした結果、当支部はH28年3月末日を以って閉会することになりました。尚、当支部のお宝（中／高の校章入り旗2旗、総会

・懇親会用の横長4m横断紙、101文集原稿、阪神大震災当時の記録）や積立金残金については、その保存・管理・活用を桂蔭会本部に託すことになりました。これで「101文集（H16年6月発行）」に示す当支部の思い（意思ある学びのDNA）は飯山高校同窓会に引き継がれ未来永劫不滅です。最後に桂蔭会の皆様方のご健康・ご活躍を祈念しここに筆をおきます。ありがとうございました。

会場を移して開かれた懇親会は、岡田庸利氏（高8）の軽妙な司会で進んだ。最初に、初代支部長であり米寿を迎えられた池川信夫氏の（中37）が「新しい飯山高校の校舎には桂蔭会の部屋が山を望む場所に設けられており、是非利用して頂きたい」との挨拶があり、大沼淳氏（中39）からは北竜湖に建てた山荘のいきさつや、「話題となった越路吹雪さんの衣装を多数保有している」等の紹介があった。足立信一氏（高3）の乾杯に引き続いての懇親の集いとなり、会場は久しぶりの再会と近況交換で、各テーブルとも懐かしさあふれる交流が続いた。しばしの歓談の後、配布された歌詞集を手に、応援歌、スキー歌、飯高別れの鐘等の歌声が切れ目なく続いた。壇上では、今回参加が増えた若手会員による歌唱の先導とともに、元気はつらつと挨拶が続く、大賑わいのパーティーとなった。宴もたけなわとなり、最後に会場に高々と掲げられた校歌「甲斐の高峰に」を見上げながら、恒例の飯山北高校歌が会場一杯、高らかに歌い上げられ、最後に猪瀬清四朗氏（高8）の勢いある三々七拍子で閉会し、互いに再開を誓って散会した。

平成二十八年三月には、飯山北高は「完校」し、飯山高校への統合となる。同窓会として、これまでの伝統をどのように継承していくか、今後の課題である。

平成26年度支部役員

支部長	青井 富雄（高19）
副支部長	高橋 彰（高24）
副支部長兼会計	阿部 靖典（高31）
会計幹事	岡田 庸利（高8）
世話人	山城 弘枝（高34）
本部副会長・代議員	長坂 邦彦（高6）